

もう9月だというのに、体育館の中はあたしの体温よりも暑かった。「バレー部は室内だから楽だよね」ってよく言われる。けど、野球部の男子が熱中症で救急車を呼ぶ騒ぎが起きたせいで、今週の土曜日の校庭での部活は中止になった。だから現時点において大谷中で一番キツイ部活は女子バレーボール部だ。

顧問の金森先生が休みで自主練になったのをいいことに、サーブだけやって遊んでいる男子たちのすぐそばで、ウチら女子はノアが狂ったように投げるボールを代わる代わるレシーブさせられていた。ノア（女子バレーボール部顧問の富野先生のこと。先輩から受け継いだアダ名なので、何でそう呼ばれるか理由は知らない）は、普段からおかし

いくせに暑さでさらにおかしくなっていた。

こんな何の得にもならない部活をやることを薦めたのはママだ。

「ママみたいに背が低いとコンプレックスになるわよ。あんたにそんな苦しい思いをして欲しくないの」

ママは何にも判っていない。バレーボールはもともと背が高い子がやるものだ。ママ似のあたしの身長は147・7センチで足踏みをしている。ママの言う通り、確かにこれはコンプレックスだけど、あたしが苦しい思いをしているのは部活のせいだ。

それでもこの夏の町田市の大会では、背が高いだけで動きがトロい先輩たちをフォローしようとする地面に近いところを駆けずり回って相手のサーブをたくさん拾った。おかげでウチら大谷中は10年ぶりに薬師池中に勝った。3年生が受験準備で引退するので、ノアは2学期からはあたしを中心にチームを作るつもりらしい。

「あれ、お前ら練習休みじゃないの？」

男子バレーボール部のウザ山が媚びるような高い声をあげた。声の先には翔太君や大輝君、航平君たち「大谷中のF4」がいる。真ん中にいるのももちろん拓海君だ（あた

しは面と向かつては成瀬君としか呼んだことはないけど。

ちょっとV6の岡田くんに似ている彼は、サッカー部のエースとして大活躍する一方で、カラオケもめちゃくちゃ上手い。去年の秋のお楽しみ会で、さっき名前を挙げた3人と一緒に東方神起を歌った時は、上級生を含む女子全員とその母親たちの口から溜息が漏れた。とにかく超盛り上がった。あたしのママなんかそれから1週間「あんな子があんたのボーイフレンドだったらねえ」と言い続けていたっけ。

今年のお楽しみ会ではEXILEをやるために陰で練習しているようだ。大勢いた方がEXILEっぽいという理由から、ウザ山は人数合わせでメンバーに入れてもらっていた。有頂天になったウザ山は、EXILEのよく知らないメンバー（たぶんちょっと前までJ Soul Brothersだった人だ）になりきって頭にヘンな剃り込み模様を入れたせいで、ウザさが3割方増していた。

「ちょっと見に来ようと思ってさあ……」

拓海君が笑いながら答えている。誰を見に来たんだろう？ もしかして女子バレーボール新エースのあたし？ ……なんてバカなことは、もう中2なのでさすがに思わない。

F4の男子はAグループの女子としか付き合わないのだ。拓海君の視線はまっすぐ体育館の壇上を向いていた。その先にはミキちゃんが立っていた。

（あたしは面と向かつては真光寺さんとか呼んだことはないけど）ミキちゃんは可愛い子揃いのAグループでもとびっきりの美少女だった。マルキューの前で何度もスカウトされたことがあるらしい。でも弁護士のお母さんがうるさいらしくて、読モの仕事とかはやっていなかった。その分、ミキちゃんはお楽しみに命をかけていた。去年、青山テルマの「そばにいるね」をピアノで弾き語りしたときの彼女は超カッコよくて、あたしもウルウルしてしまった。今年は何をやるんだろう？

でもミキちゃんのカッコを見たら何をやるのかすぐに分かった。すると耳の中から何だかゾワゾワした音が鳴り出した。いつの間にか壇上にはミキちゃんを中心にAグループの女子が勢ぞろいしていた。

鶴川駅前てTBSの社員に佐々木希と間違えられた伝説を持つ彩ちゃん、ハナチューにたまに載っている佳奈ちゃん、演劇部員でこの中ではウチらに唯一話しかけてくれる真由ちゃん、読書家でめちゃくちゃ物知りの美咲ちゃん、お父さんがドイツ人であまり

に色が白いことから男子から「トワイライト」と呼ばれている楓ちゃん、双子のナナとハチ（本当は茜と葵っていう）こと根岸姉妹、そして拓海君の妹の七海ちゃんからなるAグループ全員が、ミキちゃんと同じS L YのTシャツに体育用のショートパンツを合わせていた。少女時代だ！ Aグループは少女時代をやるんだ！

拓海君たちF4、そして噂を聞いて駆けつけてきた大勢の男子たちは、大谷中と胸に書かれているTシャツ以外はさして変わらないカッコをしているウチらをスルーして、壇に向かってワイワイと押し寄せていった。ウザ山がついていこうとしたので「練習!!」って注意したけど「うるせーんだよ、チビブスは」って言い返された。

チームメイトの萌が近づいてきて、興奮した口調で話しかけてきた。

「Aグループ、少女時代の『G e n i e』歌うんだ、なにこの先取感！ 超ヤバくない？ お楽しみ会、ちよー楽しみ！」

あたしは三つの理由でイラっときた。ひとつ。萌はあたしよりずっと可愛い（そう言っても、あの子は「うん、菜穂も可愛いよ」としか言わないけど）。先入観抜きで見たらAグループにも入れるかもしれないレベルだ。でもこのプライドのなさのせいで彼女

はBグループに甘んじているのだ。ふたつ。ショウジョジダイと呼ぶな。本当はソニョシデと呼ぶのだ。そしてみっつ。全然先取りしてないよ！ 「G e n i e」は韓国では去年の6月に発売されているんだから。

何で知っているかというと、あたしは発売されてすぐにCDを買ったからだ。ママの気まぐれのおかげだ。

「友達からすごい韓流ショップが新大久保にあるって聞いたんだけど、ひとりじゃ怖くて行けない。あんたボディガードについてきなさい」

150センチもない女子がどうやってたらボディガードの役に立つのだろうと思ったけど、とにかく母娘ふたりで小田急と山手線を乗り継いでK O R E A P L A Z Aというお店に行った。そこであたしは少女時代と出会ったのだ。

全員がとてもきれいな。脚なんかあたしのウエストの位置から伸びているみたいに長い。何より表情が自信満々なのがすごく良かった。C D ジャケットの中で並んでポーズを決める彼女たちは日本のアイドルよりも、子どもの頃に見ていた戦隊もののヒーローに似ていた。まるで敵との戦いに勝ったあとのハリケンジャーだ。ママがシン・スンプンの

CDを求めて店の奥に姿を消すのを見届けて、あたしは「Genie」を素早くレジに運んでいった。

以来、あたしは彼女たちの密かな、でも熱狂的なファンになった。YouTubeを見て振り付けを完璧にマスターすると、それだけじゃ物足りなくなつて今度はひとりで行ってKOREA PLAZAまで行ってライブDVDを買った。今では「Genie」の振り付けなんて目をつぶっていてもできる。あたしほど少女時代を上手く踊れる子はいないはずだ。少なくともこの大谷中では。でもAグループは日本で発売されたばかりの曲の振り付けをどうやってマスターしたのだろうか？

壇のすぐ下にポツンと立っている、S L YのTシャツに制服のスカートの女の子が、同じCグループの裕子だつて判明した時、あたしはすべてを理解した。あたしがコピーしてあげたDVDを、裕子はAグループに横流したんだ。ホント、許せない。あの子はあたしを裏切るようなことをしてAグループに仲間入りできるとでも思ったんだろうか？ でも裕子はメンバーには入れてもらえず、壇上にすらあげてもらえなかった。Aグループの冷静な判断をさすがと思いつつ、同時にゾツとした。もし裕子じゃなくて

あたしがDVDを渡したとしても、壇の下で晒しものになっていただろうから。

「みんな、裕子からもらつたDVD見て練習したよね？」

ミキちゃんがトレードマークの赤い手帳を片手に、鋭い声をあげた。

「まず曲無しでステップだけ合わせるからね」

「えーっ、早く歌いたいよお」

彩ちゃんが口をはさんだけどミキちゃんはその提案をはね除けた。

「まずは動きに集中。曲はそれから！」

「ワンツー！ ワンツー！」

横一列に並んだ9人が、掛け声をかけながら踊り始めた。1年間ずっと踊っていたあたしより上手いわけなんかない……そんな自信はすぐに吹き飛んでしまった。Aグループは町田の少女時代だ。とてもきれいな。脚が長くて自信満々だ。体育館の熱気のせいだ。Aグループの体から何かが湧き出て彼女たちをキラキラと輝かせた。それはたぶんあたしが体からダラダラ流している汗とは全然別なものなんだろう。その姿を見た男子たちは、照れたのか「セクシー！」とかバカな掛け声をかけ始めた。彼女たちは戦いに勝つ

た。そしてあたしは負けたんだ。

Aグループの掛け声が止まった瞬間、こめかみに凄いい音が聞こえたかと思うと、あたしは横にふっ飛ばされた。ノアが、よそ見していたあたしに怒ってボールを投げつけたのだ。

「そこ!! 何やってんの?」

体育館中に爆笑が起った。そこにいた全員が笑っていた。ミキちゃんだけがこわばった顔をしていたけど。ノアは怒るとおネエ言葉になるので、よくウチらの笑いものになっていたけど、この場合、笑われているのは明らかにあたしの方だ。このまんま死んでしまいたい。体育館の床の上であたしはそのままのカッコで小さくなって横たわっていた。でもミキちゃんの言葉を聞いたら気が変わった。

「じゃあ、曲流すから歌いながらやろっ」

男子たちはオオーッと歓声をあげた。このままこんなところにいたら惨めさで本当に死んでしまう。あたしはヨロヨロと立ち上がりノアのところへ歩み寄った。

「先生、すいませんでした。ちょっと外でランニングしてきます」

ノアは慌てたような、申しわけないような顔でこう言った。

「おい、いま外なんか走ったら倒れるぞ」

「いいんです、ちょっと走ってきます」

あたしは外に逃げ出した。校庭は体育館の中よりさらに暑くて、陽の光が地面に照り返してすべてが白く見えた。あたしは耳の中からドロっとしたものが流れ出すのを感じながら、それでも校庭を走った。黙って走った。体育館の中から「Genie」のイントロが聴こえてくる。この1年間の練習の成果なのか、ランニングのテンポがいつものまにかリズムに合ってきてダンスのようになってしまうのが悲しかった。町田の少女時代が、コーラス部分を歌い出した。

そうよこの地球ほしは思い通り

二人なら望み通り 未来さえもお見通し

叶えてあげる

走りながら、よろけながら、踊りながら、ぼんやりこう思った。あたしの未来はきっと、彼女たちのそれとは全然違うものになるだろうって。

やがて歌声は聞こえなくなり、代わりに高いところから何かが落ちるような音が聞こえたのを最後に、あたしの世界は真っ白になった。